

天風のゼダ

アルファるふぁ/保利滝良

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球外からやって来た人類を攻撃する存在、敵性金属体。人類は必死に抵抗するが、その強さに圧倒される。有効打を与えられず、日に日に疲労していく人類。明確な勝利が見えない戦いが続き、滅亡までのカウントダウンが始まっていた。

人類の破滅が迫るそのとき、『何か』が現れた。それは、人々の願いと想いを力とする存在。そして人は希望を胸にする

天風のゼダ

今、運命の戦いが始まる

目次

第1話 運命の日

Aパート |

1

Bパート |

13

Cパート |

24

第2話 苦悩と決意

Aパート |

32

Bパート |

44

Cパート |

57

第3話 その名はゼダ

Aパート |

67

第1話 運命の日

A.パート

太陽系第三番惑星。この惑星には、命が数多く住んでいる。

この星には、他の様々な生物を抑えて頂点に立った存在がいる。

それが人類だった

彼らは互いに争い合い、奪い合い、幾度となく自らの住む星を汚し続けた。彼らは時に増長し、時に嘆き、時に息絶えながら、未来を目指した。

そして人類はついに、自分達の星の外の宇宙の存在に気付いた。どこまでも続く未知の向こうへ、期待と希望を胸にした。

だが、その宇宙から彼らに贈られてきたのは、どうしようもなく強大な敵の存在だった。

男が一つ、深呼吸をした。

視線を巡らすと、正面に大画面のモニタ。その周りを取り囲むように、無数のデスクとコンピュータが配置されていた。コンピュータの前にはそれを真剣な表情で操作する、同一の服装の人間達がいた。

コンピュータの前で人間が作業をしているのは当たり前で、別段驚くようなことでもない。今注目すべきなのは、大モニタに写されるであろう情報だ。

ここは巨大な部屋だ。部屋の隅にあるドアの向こうには、緊急作戦指令室と書かれた看板が立っているはずであろう。

ここで扱われるのは人類の敵との戦闘のための情報で、今から行われるのはその敵との戦闘なのだ。

男の目が細まった。張り詰めた緊張が、部屋中を支配していた。

「来ました。約五分後に地上へ浮上する模様」

一人の女性が、よく通る声で報告をした。それが発端だった。

「確率90%で敵性金属体と推定されます」

「空戦軍団のホエールズ及びソニックストライカー、予測出現ポイントで旋回を開始」

「海戦軍団の各艦隊、配置既に終了」

作戦指令室に飛び交う声。情報処理官達が、モニタの前で送られたデータを確認している。

「メインモニタに現況映像、出します！」

男の視線の先にある大モニタに、真上から見た小型の島が写し出された。衛生からの映像だろう

島の周りを取り囲むように、イージス艦が並んでいる。島の周囲をなぞるように、大型の航空機と攻撃機が飛んでいる。

これから始まるのだ、戦闘が。

ついに男が声を出した。

「カウントダウン」

「了解。敵性金属体出現まで残り50、49、48、47・・・」

男は口を真一文字に引き結び、モニタを凝視した。作戦指揮官として、今から起こる光景を見逃すわけにはいかない。

思わずIGFと刺繍された赤いワッペンを握り締める。その下の元田義弘の文字に、無数のシワが寄った。

画面の向こうの戦士達は、自分が今から発する命令に従ってくれるだろうか。この作

戦指令室に送られてくるのが正しい情報なのか。そもそも敵に勝てるのか。

様々な不安感が男の胸をよぎる。だが、それは今には必要ないものだ。

「5、4、3、2、1・・・」

女性オペレーターがカウントダウンを終えた。

その現象は、カウントが0になった途端に始まった。

「敵性金属体、陸奥島に浮上します！」

メインモニタに写る小島の真ん中。そこから、黒い液体がじわりと染み出した。墨汁を垂らした布を下から見たようだ、と男は思った。

その瞬間に、男は最初の命令を発する。

「全部隊全火力使用許可、戦闘を開始せよ!!」

その掛け声が終わったとき、陸奥島に現れた墨汁は一つの塊に変化した。太くて長い、円柱の形に。

イージス艦から、航空機から、数えきれない程のミサイルが円柱へ発射される。

戦いが始まった。

島の中心にそびえ立つ、黒光りする円柱。敵性金属体と呼ばれるそれは、ただ静かに

そこに屹立していた。

そこへ飛んでくる十数機の飛行機。そのどれもが、物騒にも機関砲やミサイルを搭載していた。

I G F。 I n t e r n a t i o n a l G u a r d n e r F o r c e の略称だ。国際防衛軍と訳される。

彼等の仕事はたった一つ。宇宙からやってきた人類を攻撃する存在、敵性金属体を攻撃、撃破することだ。

各国軍から独立した指揮系統を持つので、このように素早く作戦を立てることができ

る。「こちら指揮室。チームレオン、攻撃開始。」

「こちらチームレオン、了解。敵性金属体へ総攻撃をかける。」

そんな防衛集団の中のトップガン、チームレオンの隊長は、通信に軽く答えた。その目線は通信機ではなく、黒い柱に注がれている。

敵性金属体タワー型に、包み込むように飛んでくる物が無数にあった。洋上のイージス艦隊からのミサイル攻撃だ。高速で飛行する弾頭が、次々と黒光りするボディに突き刺さる。

爆発が金属体の巨体を隠した。灰色の煙が爆風に煽られ、柱をすっぽり覆ってしまっ

たのだ。

「レオン各機、警戒を怠るなよ。」

「了解。」

「了解。」

ぬか喜びはできない。隊長は隊員の注意力が途切れないよう釘を刺した。

二人の部下が返事をしたその時、IGFの攻撃機ソニックストライカーの目の前を何が塞いだ。レオン隊が各々バラバラな軌道でそれを避ける。

現れたのは光線だ。真っ直ぐ伸びる光の棒。その発射点は、爆煙の中だ。

敵性金属体のレーザー攻撃。厚さ数十センチの鋼鉄をも融かすという強力な飛び道具だ。

レオン隊隊長は光線の進行方向を見て驚愕した。他のチームの機体が、墜とされていった。主翼をやられたのか、きりもみしながらソニックストライカーが陸奥島の大地に飛び込んだのが見えた。

ミサイルが起こすものより小さな爆発が起こった。

「ロックオン急げ、ミサイル全弾発射だ。」

指示を飛ばしながら操縦桿を動かす。この機体は言うことを聞く。

正面に敵性金属体。位置取りは完璧、あとは簡単だ。

「発射・・・！」

ソニックストライカーの主翼下、胴体内部からいくつものミサイルが放たれた。ずんぐりとしたミサイル達は、ただ愚直に敵へ飛んでいく。

敵性金属体の表面を爆炎が舐めた。敵の表面で炎が僅かに燃えている。燻っている。「敵性金属体タワー型、ダメージ微少！健在です！」

だがだと言ってこれだけでは勝てるはずもない。いくらミサイルやら砲弾を撃ち込んでも、コイツらには大したダメージにはならない。

よしんばダメージを与えたとしても、その姿を変えられる敵性金属体は、液体化して逃走してしまう。

こちらは敵を完全に倒す術はなく、敵はそもそも痛手を追っても安定して逃げる事ができる。

「こんな連中とどう戦えっつんだ・・・ぐおおっ！」

人類的想いを代弁したような独白。だが直後に、彼は光に焼かれて消えた。敵性金属体の、レーザー攻撃だ。

骨も残らなかった。

「レオン隊全滅！イージス艦隊も三隻が大破しました！」

「ソニックストライカー、残数十。内四機がホエールズで補給を受けています。」

「空戦部隊の損害が四割を上回りました。元田副司令、撤退許可を！」

義弘は歯軋りした。

「……俺は部下を無駄死にさせることしかできなかったのか！」

最新鋭の音速攻撃機を二十、その輸送用の飛行母艦ホエールズを二隻、イージス艦を八隻。なかなかの大部隊だ。それが、赤子の手を捻るように蹂躪されている。

「おのれ……！」

副司令元田義弘に采配ミスは無かった。素早くそれでいて的確な指揮をしていた。それでも、この様だ。

敵性金属体はそれだけ強力なのだ。

「ホエールズにソニックストライカーをすべて収用、残存艦隊と共に撤退せよ。北海道の空母艦隊はまだか！」

「各部隊に到達します。北海道からの増援ま到着まで、残り三時間です！」

義弘の顔が悔しさに歪んだ。胸のワッペンを引き千切れそうなくらいに握る。

無力感が彼の心を苛んだ。

三時間だ。三時間あの化け者共を野放しだ。その時までの時間稼ぎも、今の戦力では無理だ。

「ホエールズA、レーザー直撃！」

オペレーターの焦りきった報告に、義弘が目を見開いた。

メインモニタを見る。そこに、クジラというよりジンベエザメに似た縦に薄い航空機が写っていた。巨大なサイズだ。

しかしその航空機、飛行母艦ホエールズからは、炎と黒煙が吹き出していた。

この局面でソニックストライカーの輸送手段が潰されるのは痛い。攻撃機部隊を運ぶホエールズが一つだけだと、撤退の際にそこへソニックストライカーが集中し、ホエールズの搭載重量が上がる。ホエールズの重量が上がるとスピードは自然と下がる。鈍足な飛行機など敵性金属体の餌食だ。

つまり撤退の難易度が上がるのだ。

「残存攻撃機隊にホエールズBへの集結を指示……いや、ホエールズAの乗員にすぐに脱出命令を出せ！」

「ホエールズAの機長から通信が。」

「何？」

「副司令のモニターに繋がります。」

義弘は下を向いた。指揮に熱が入りすぎて椅子から立ち上がったため、机の上のモニターを見下ろさなくてはならない。

そこには、初老と思わしき髭面の男性がいた。ホエールズAのお頭だ。

「こちらホエールズA、木村芳武機長であります。ホエールズAはダメージ限界値を突破、間も無く墜落します。」

落ちていた様子の木村機長と対照的に、義弘は張り詰めた剣幕でマイクを引つ掴んだ。

「急いで生き残った乗員と脱出しろ！今すぐにだ！むざむざ死ぬな！」

「申し訳ありません元田副司令、それは出来ません。」

「まさか・・・まさか！」

義弘の脳裏に一つの可能性が浮かんだ。

墜落寸前のホエールズ。いやに落ちて着いた機長。補給用で残っている弾薬と燃料。

「パイロットを除いた乗員四十名、そこから私を抜いて三十九名、陸奥島の南西部の海に脱出させました。私はここに残り、最後の一仕事をさせていただきます。」

「止せ木村機長、貴官も脱出するんだ！」

「お心遣い感謝します、副司令。しかし撤退までの時間稼ぎは必要です。それに私は負傷し、腹をやられました。もう長くはありません。」

木村機長が口から血の塊を吐き出した。口髭が真っ赤に染まる。

そして彼は目を見開いた。そこには、寂しい決意の光があった。

「ホエールズを無駄にしてみましたことを、謝罪します。」

「ホエールズA、進路変更。敵性金属体へ特攻していきます！」
オペレーターが振り向いて叫んだ。

「機長！」

「クルー達を、お願いします！」

それつきり、木村機長の顔は消えた。義弘の机のモニターには、ノイズしか写らない。メインモニターを見た。真っ黒なタワーに突き刺さる、巨大な航空機が見えた。

ホエールズは破裂するように爆散した。

「敵性金属体タワー型の様子が……」

敵性金属体のホエールズを食らった部分が大きくへこんでいる。木村芳武機長の最期の一撃の成果だった。

敵性金属体がゆつたりと形を歪める。円筒の体は、溶けるように不定形へと移行していった。

「地中へ潜っていきます！」

「帰っていくのか……」

黒い水となった金属体は、吸い込まれるように地面に入ってしまった。倒したわけではない。金属反応レーダーには存在が確認されている。

倒せなかった、というのが正しい。

人類は、敵性金属体との戦闘において全て、奴等を撃滅したことはない。お帰りいただくことしかできていない。

肝心の撃退すら、できる確率は低い。

「・・・状況終了、全部隊帰還せよ。巡洋艦はぎのはホエールズAのクルーを回収せよ。」
「了解、全部隊撤収。」

「了解、巡洋艦はぎの応答せよ。こちら作戦指揮本部、巡洋艦はぎの応答せよ」

「撃墜されたソニックストライカーや撃沈された艦隊の乗員は積極的に回収しろ。北海道艦隊は引き続き来させろ、捜索隊として参加してもらおう。以上だ。」

リーダーからも確認できない位置にまで敵性金属体がいなくなつてから、義弘は命令した。先程までの取り乱した様子は消えていた。

そんな態度を残しては、作戦に支障が出るからだ。感情を殺さなくてはいけない。かっつた。

だが、他の人間が再び作業に集中するのを確認して、椅子にもたれた。

「人類は、奴等に勝てないのか？」

誰にも聞こえないように呟いた。

だがその疑問は、その場の全員が等しく持っていた。

B.パート

がたんごとん。在来線の車輪が鳴らす重たい金属音が、その場にいるサラリーマン達の耳を叩いた。

がたん、ごとん。がたん、ごとん。彼らにとっては嫌になるほど聞き慣れた音である。

だが、その中の一人にとっては、いまだに聞き慣れない音でもある。

「くそお、まだかよお・・・このままじゃ五分遅れじゃねえか！」

いかにも着こなせていないスーツを身に纏い、青ざめた顔で座席に腰を下ろす男が一人。その髪の毛は、一房跳ねている。寝癖だ。

新人のリーマンは、カバンから携帯電話を引っ張り出して覗く。九時五分。勤務先には九時二十分までに着かなくてはいけない。

ちなみに目的地到着まで残り二十分である。遅刻だ。

「うう・・・マジかよ、ウツソだろ・・・」

今までやらかした二回の遅刻を思い出し、男は身震いした。今回の三回目。クビへ

のリーチがクビへのビンゴへ姿を変えるだろう。

せめて遅刻するならば、会社へ電話した方がいい。報告連絡相談は社会の基本だ。携帯電話の電話帳機能を起動し、男は自分の勤務先へ電話を掛けた。

敵性金属体という存在がいる。ある日唐突に地球へ降り立ち、突然人類へ攻撃してきた謎の存在だ。

人類はこの共通の驚異のために手を取り合い、敵性金属体を撃破するためだけの国際組織を作った。

International Guardians For s. 略してIGF。

彼らの活躍により、人類はかろうじて息を繋いでいた。

結果、人々は変わらぬ日常を過ごすことができている。時には敵性金属体が襲ってくることもあるだろうが、それならIGFがなんとかしてくれる。

一般市民達は、安心していつもの勤めを果たすのだった。

それが当たり前だと、一般市民たちは思い込んでいる。

「ありや、おつかしいな。」

携帯電話を耳から離して、男は画面を見た。

番号は合っているのに、何度掛けても電話に出て貰えない。もう一度掛けてみる。

「お掛けになった番号は、不都合により、通話できません。もう一度お掛け直してください。」

「なんかあったのかな」

通話アナウンスの事務的な言葉を聞いて、男は怪訝な顔をした。

その時だった。地響きがその車両を襲ったのは。

最初に音。次に振動。最後に浮遊。

まず、はるか遠くから轟音が耳を叩いた。次に、ビリビリと電車が揺れた。最後に、乗客がふわっと空中に浮いた。

だが浮遊したのは一秒に満たない時間であった。

「……わあああああッ?!?!」

音やら振動やらが無茶苦茶に暴れまわり、決して広くないスペースの中で全てが引つ

掻き回される。人がしっちゃんかめっちゃんかめに飛び回り、天井と床が数回反転した。そしてそのカオスに巻き込まれ、男は意識を失った。

義弘が座る指揮官席のモニターに、敵性金属体の現在の様子が衛星映像で写る。周りには、何人ものオペレーター達。その全員が、IGFの正規隊員の訓練過程を修了している。

ここはIGF日本支部、作戦指揮室である。ここでは敵性金属体の排除のために、情報収集や情報管制などが行われる。そして、その名の通り作戦の指揮も。

「敵性金属体の出現を確認しました！三重県の津市です！」

情報管制官の一人が声をあげる。彼の見るレーダーには、赤い丸が一つ吐いていた。敵性金属体の体は、その名前の通り金属によく似ている。レーダーにかかるのは早い。

「戦力が限られるか……」

義弘の目が細められた。

敵の出現位置は都市部。IGF陸軍の部隊は入り組んだ都市部では身動きがとれず、

海軍の艦砲射撃では無駄な被害を出す。

ならば消去法で空軍を出すべきだろうが、義弘はそれに並々ならぬ拒否感を覚えた。陸奥島での一戦にて、IGF日本支部の空軍戦力は大幅に減少したからだ。

だが他に手はない。

「日本支部にある全てのソニックストライカーを出撃させ、現場へ急行させろ。陸軍はホエールズで一個師団を派遣、現地の避難プランに従い市民の避難誘導を行え。」

元田義弘の指示の元、

「了解！こちら作戦指揮室、空軍司令応答せよ……」

「こちら作戦指揮室オペレーター、陸軍に指令アリ……」

一気に慌ただしくなる作戦指揮室。これから始まるのは、恐ろしい戦闘である。

それも、勝ち目の少ない強敵相手との。

「……おのれ」

敵性金属体との終わらない戦いに、人類は疲弊していた。世界中の戦力が力を合わせて戦うIGFという共同体を作ってさえ、敵性金属体との戦闘が終わる気配はない。

日本支部の兵士も含めて、たくさんの人間が死んだ。どんな軍隊よりも強力な戦闘能力を持つIGFでさえこの始末だ。

果たして人類は勝てるのか。

「ただやられるしかないというのか……！」

義弘は、これからも待つ激戦に震えた。

彼が見つめるモニターの向こうで、ジェット戦闘機の編隊がスクランブル発進しているのが見えた。

大の字に寝転んでいた男は、うつすらと目を開け始めた。ぼやける視界を鬱陶しく思い、数回の瞬きをして、意識を完全に覚醒させる。

首を傾げる。視線の先には電車の照明。

どうして電車の照明が自分の真横にあるのか、男には一瞬わからなかった。だが、少し考えたところで自分が電車の天井に転がっているのがわかった。

慌てて飛び起きる。

自分の乗っていた電車は天地逆さに転がり、床と天井の位置が入れ替わった状態になっている。何がなんだかわからないまま辺りを見渡す。すると様々な音が耳を突っついてきた。

悲鳴、呻き声、何かの軋む音、サイレン。

「なんなんだよ、一体・・・どうなってんだよ」

「え、どこ？お父さんどこ？」

「うそ、やだもう何があつたの！ちよつと！」

事故にみまわれた乗客たちがパニックを起こしている。

「あああ痛い、痛い痛い痛い痛い痛い！血イイイイイ・・・」

「腕、腕が！腕ええ！」

「起きてよ、ねえ！生きてるんでしょ！返事してよねえ！」

中には大怪我をしている者もいる。

転がるほどの衝撃を受けた電車はぎしぎしと音をたて、非常事態を嫌が応にも理解させるサイレンが流れる。

窓から空を見ると、辺り一面瓦礫の山と化していた。そのさらに向こう、山のように大きい何かのシルエットがある。

ヒト型のように見える。だが、ビルより大きい人間なんていない。金属光沢を持つその姿は、間違いなく、人類最大の敵だった。

敵性金属体。数多の市民にとって非日常の存在が、人工密集地に現れた。

この電車は、恐らく奴にやられたのだ。

歩くだけでビル街を無茶苦茶にして、何もかもを踏み潰す。ちつぽけな人間は、なにもできず怯えることしかできない。

「苦しい……何が……」

「うう」

「お母さん助けて、助けて、助けて」

鳴り響くサイレン。しかしそれを塗り潰す、人々の悲鳴。

蹴つ飛ばされた電車でさえこんな有り様だ。襲撃されている都市部は一体どんなことになっているのか。

砕けたガラス窓を潜り抜け、男は外へ出た。電車の中にいると危険かはわからないが、とりあえず逃げるべきだと考えた。

スーツの上着を脱ぎ捨てて、屈んで潜る。逆さまになった椅子に頭をぶつけつつ、無事に電車の外に出られた。

視界が広くなったので、惨状の様子がもつと良くわかった。低いビルは殆ど瓦礫の山に消えている。炎があちこちからあがり、黒煙がもうもうと立ち上っていた。

何人もの人間が押し込まれているだろう高層ビルディングが倒れた。その隣のビルによたりかかると、諸共に崩れ去る。大質量の落下は、電車の位置にも衝撃波をもたらした。

「・・・あつ」

軋みが酷くなってきた。ギシギシという音は大きく小刻みにその場の人間を刺激する。

電車が、崩れる。

その答えに至った乗客は何人いただろうか。突然の出来事にパニックを起こしていた彼等が更に慌ただしくなる。

「助けて・・・」

男が呆けたようにその光景を見ていると、足元から声が聞こえた。

少女の声だ。取り残された人はまだ多くいるのだ。

窓を見る。頭を打ったのかこめかみから血を流す老人と、その隣にピンクのシャツとスカートの女の子がいた。

孫と祖父だろう。女の子の保護者として彼女を守るはずの老人は、意識がない。

「助けて・・・助けて・・・」

老人に寄り添いながら少女は、男に向かって必死に助けを求めている。

「あ、ああ！待ってて今・・・」

引つ張り出してやる、続けようとしたその時。電車から絶え間なく発せられていた軋み音が消えた。

そして、上から、下へ、踏みつけられたように、電車がつぶれた。

「えっ？あつ・・・あ」

男の目の前から、少女は消えた。あとには潰れた電車だけ。

あれだけ煩かった悲鳴も、一瞬にして消え去った。

体から指一本を動かす力も抜けていく。

だが、体は危機管理を続けていた。爆音が耳を叩くと、反射的にそちらを向いてしま
う。

粉々になる建物。吹き上がる炎。その中心に、敵性金属体が在った。

頭部からレーザー光線を放ち、ビルを豆腐のように切り裂く。高層ビルの上部は切り

落とされて、身長が変わった。

落とされた部分は重力のままに。

男は確かに見た。壊される日常を。何もかもが破壊される様を。

だが男は愚かだった。ちっぽけな人間では何もできないことも、気づけない。人類は
勝てる、そう信じていた。

希望を諦めなかった。

人間は必ず勝ると、そう思っていた。

敵性金属体を睨み付ける。

「チクシヨウ、チクシヨウ、クソツタレ！」

何もできない自分がくやしい。目の前の女の子すら助けられなかった、駄目な自分が恨めしい。

何もできず、出鱈目な奴に誰かを沢山殺されるのを見ているしかない。

それが悔しい。

男の目から、潤いが一滴落ちた。

二滴三滴、それはやがてとめどない涙となる。男は泣いた。涙を流して泣いた。

だが奇跡は唐突に訪れる。

涙をこぼす男が見上げた先に、小さく光る何かがあった。不定期の明滅を繰り返し、何かに何かを伝えたいことがあるように感じる。現在時刻は九時前だ。星が見える時間帯ではない。

星でないなら一体なんだと見続けると、その光はだんだん大きくなっていった。否、光の方が近付いていたのだ。

そして光は、男の目の前で止まった。

Cパート

男の目の前に落ちた光は、少しずつ収束し、やがて一つの形を作った。積み上げられた瓦礫に光は収まり、細長い小物の形をとる。

「なんだ・・・？」

拾い上げてみる。

小型のペンライトのような形をしたその物体は、上端に透明の半球が、側面に小さなボタンがくつついていた。

ボタンと、恐らく電球のようなもの。男はこれを懐中電灯だと仮定した。だが、疑問があつた。

懐中電灯は空から落ちてくるのだろうか。

拾い上げ、そして、興味半分にボタンを押した。

「くっ・・・うおおっ！」

閃光が、男の握る物体から放たれた。周囲を明るく照らしてながら、光は広がる。やがて男はその光に包まれて、消えてしまった。光はなお大きくなっていく。

そして、

IGF司令室。情報管制モニターを見ていたオペレーターの一人が、目を見開いた。

「さ、作戦区域に光が！かなりの照射範囲です！」

「金属体の増援か!？」

「違います、これは．．．?！」

義弘の質問に、管制官は否定した。彼の目はモニターに釘付けになっている。

飛び交う指示の声の中で、異常を感知した管制官が、声を大にして叫ぶ。

「敵性金属体ではありません、これは．．．」

その瞬間、モニターは閃光に塗り潰された。

光の中に巨大な人型のシルエットが浮かび上がる。そのシルエットは徐々にその実体を形作っていく。

光の中に現れたその姿は、ゆっくりと形を作っていく。放たれた光が薄まっていく。人型が鮮明に現れてきた。

光が完全に消えると、シルエットの形ままの巨人がそこにいた。拳を握り直立するそ

の姿は、阿修羅像を彷彿とさせた。

体に引かれた数本の線には、目映いばかりの黄色い輝き。ホワイトグレーの体表に、うっすらと筋肉のような収縮がある。

人の形をしていて人ではなく。まるで子供向けの番組に出てくるヒーローのような姿をしていた。

敵性金属体ヒューマン型は、突如出現した謎の存在に対し、まったくの躊躇なくレーザーを発射した。

鉄筋コンクリートを容易く溶断する光線。敵性金属体の方を向いていた巨人は、屈み込んでそれを避けた。頭上を通り抜ける高熱の光。

そのままの姿勢で、黄色の闘士が金属体へと飛びかかる。ジャンプ一飛びで相手の目と鼻の先にたどり着いた巨人は、固く握りしめた右拳を叩き付けた。

拳が当たり、敵の顔から火花が飛び散る。

人間で言えば顔に当たる部分へ一撃をもらい、敵性金属体がよろけた。そこへ飛び込む左フック。ダメージを与えて、腹部に蹴りを一発。

一撃ごとに、敵性金属体の体から火花が出た。

二歩、三歩と後退りし、ヒューマン型は再びレーザーを放った。巨人の体表を舐めるように通る。

だが巨人は、ダメージを負って苦しそうにはするものの、ビルのように溶断されたりはしない。まだ倒れない。今だ健在。

巨人に向けてもう一度光線を放とうとする敵性金属体。頭頂部へ集まる閃光を目にし、巨人はすぐさま飛び上がった。

敵性金属体のレーザーはアスファルトを焼き切るが、黄色の闘士に傷を与えることはできなかった。空中へ逃れた巨人は、飛び上がった先の空に留まっている。そう、巨人は空に浮遊していた。

狙いをつけると、黄色の闘士はヒューマン型へと落下した。揃えた両足を下にして、重力に従い降下する。

敵性金属体はその両足によるドロップキックを受け止めきれなかった。打ち込まれた攻撃に、火花と共に情けなく吹っ飛ばされる。

蹴りを決めた巨人は、転倒することなくそのまま着地した。

攻撃に耐えられず倒れた金属体の脚を掴んで、振り回し始めた。自分ごと回り、回り、回転がピークに達する。回転の勢いのまま、黄色の闘士は掴んだ手を放し、放り投げた。ドロップキックに続きジャイアントスイングまで食らった金属体は、交差点の真ん中に落ちた。ダメージが大きいのか、ヨロヨロとどんくさい動きで起き上がる。

敵性金属体が弱ったところへ、巨人はある行動をとった。両拳を胸の前で突き合わせ

たのだ。拳と拳が接触したとき、閃光が腕から発せられた。

黄色の闘士はそのまま両手を横へ広げる。腕全体に光の膜が現れる。最後の仕上げに、巨人は立てた左手首に右拳をくっ付けた。二つの光の膜が一際と大きく輝いた。

そして、腕の接触点から光が溢れ出す。

山吹の花のような色の光が、凄まじい勢いの流れとなって発射された。その大きさは、敵性金属体が撃つレーザーとは比べ物にならない。

立ち上がるのに時間をかけてしまったヒューマン型は、その一発をまともに喰らった。巨人の腕から出た光は、金属体の胸部や腹部に浴びせかけられ、約三秒間放射された。

強力なエネルギーの放射を受けて、敵性金属体は抵抗できない。

光が収まる。と、同時に、敵性金属体は痙攣のようにピクピクと震えた。大爆発。

敵性金属体ヒューマン型は、内側から破裂するように炎と煙とを吐き出し、消し飛んだ。破片は一つ残らず、液化化して地下へ逃げ込むこともできなかった。

津市を蹂躪した敵はここに葬られた。それを見守るように確認した黄色の闘士は、光の粒子に包まれ、跡形もなく消え去った。

大モニターで全てを見ていた義弘は、驚愕に見開かれた目と呆けたように開いた口を、暫く閉じることができなかった。

いきなり現れた巨人が、敵性金属体を殲滅したのだ。液状化させての撤退ではなく、殲滅。

レーダーからも敵性金属体ヒューマン型の情報は消えていた。間違いなく、忌々しい敵は完全に消滅させられたのだ。

一体どうやって。

ミサイルや大砲、核爆弾をいくら食らってもおめおめと逃げおおせた存在を、あの巨人はどうやって消し飛ばしたのか。

義弘は口角泡を飛ばして指示を出した。

「津市の避難民に必要であろう物資をリストアップしろ！その後ありつたけホエールズに積み込め！自衛隊に連絡して避難や災害復旧の提携体制をとれ！それから、今すぐ研究チームを呼べ！」

奇跡を目の当たりにしたIGFオペレーター達が、義弘の一括に慌てて仕事を再開する。各員が素早く、それでいて的確な作業をこなしていく中、義弘はポツリと呟くよう

に言った。

「あの巨人が、俺達の未来を握っているんだ……！」

その顔は、希望への期待に満ち溢れていた。

粉々に崩れた高層ビルの残骸。敵性金属体の被害により、この一帯は目を覆うような有り様となっていた。

そのビルの傍に、もたれ掛かるように座る男がいた。

「今のは、何だったんだ……？」

手の中にある懐中電灯のような物体を見つめて、そう呟く。だが答えは反ってこない。辺りは敵性金属体により荒らされ、見渡す限りの場所に生存者はいない。

だが、敵性金属体はもういない。この都市を破壊して回ったヒューマン型は、この懐中電灯から生まれた何かによって倒された。

その何かに、男は変身していたのだ。

「俺が……やったのか……？」

ビルよりも巨大な身体となつて敵と戦う。まるで何かのフィクションのようなシチュエーションだった。だが、男は確かに戦いの記憶を覚えていた。

「俺が・・・」

再び懐中電灯を握り締め、男は目をつぶった。

彼の名前は祭轟。なんの取り柄もない一人の人間。

彼の手には、人類の希望があつた

第2話 苦悩と決意

Aパート

執務室の執務机に両肘を置き、元田は呻いていた。先日の敵性金属体との戦闘に関連したあることについて、四方八方から根掘り葉掘りの質問責めに遭ったからである。

それは、巨人。敵性金属体を肉弾戦で圧倒し、完全撃破してみせたあの巨人についてであった。

日本国民が、IGF上層部が、マスコミが、とにかく巨人のことを元田に問い質してきた。

だが彼にはこう答えるしかなかった。

「こちらとしてもあの巨人の情報は掴んでいません。現在IGFジャパンは、あの巨人のための調査班を用意していません。」

つまりはこうだ。知るか、こつちが知りたいくらいだ。

だが真実を伝えても尚信用してもらえず、挙げ句には本部から日本支部に調査の手が入ることになる有り様だった。

「こんなことをしている場合じゃないんだ。津市の復旧は始まったばかりで、被災者の

支援も滞っている。空軍海軍陸軍すべてが大打撃を受けて戦力の補充も進めなければならぬ。なのに……」

苦虫を噛み潰したような表情でひとり呟く。頭の中で今後のことのシミュレーションを続け、そして溜め息をつく。

避難や復旧は日本の自衛隊が協力してくれるのでまだいい。問題は戦力だ。先の陸奥島での戦いと、今回の津市戦にて、IGF日本支部の持つ兵力は大きく減らされた。

IGFの仕事は戦うことだ。それも凄まじく強い敵性金属体相手に。なのに戦うための武器が少なくなってきた。

戦力、戦力がほしい。そして、元田はまた呟いた。

「あの巨人が、こちらに来てくれれば……！」

無い物ねだり。とらぬ狸の皮算用。

それでも元田は願ってしまう。突如現れたあの巨人が、自分達と共に戦ってくれることを。

もう無駄死にを生ませないためにも。

「萩原です。失礼します。」

両肘を置くポーズから頭を抱えるポーズに移行していた元田は、女の声に慌てた。姿勢を正し、胸のワツペンの埃を払って一言。

「入ってくれ。」

執務室の扉を開けて、IGFの制服を着た女がツカツカと入室する。肩まである黒髪を揺らしつつ部屋の中央へ。両足を揃え、背筋を伸ばし敬礼。

「御呼びに預かり光栄です、元田副司令。」

元田も椅子から立ち上がり、萩原の瞳を見ながら敬礼を返す。

「わざわざありがとうございます、萩原君。日本支部陸軍隊長の君を呼び出ししてすまん。」

「とんでもございません。それで、ご用件は何でしょうか。」

敬礼を解きつつ、元田は目を細める。

「津市の調査だ。」

「調査……でありますか。」

「そうだ。君も見ただろう、あの巨人を。」

「はい。かなりの戦闘能力でした。」

「彼はまだ、津市にいるかもしれない。」

萩原は声のトーンから、元田の本気を察した。しかし彼女も要職に就く立場である。

二つ返事で受けるわけにはいかなかった。

「質問をよろしいでしょうか、副司令。」

「ああ、答えよう。」

「彼、と仰いましたが。何か確信をお持ちのようですが…それが何かお答え頂けますか？」

元田は深く頷き、目を逸らさずに言う。

確かな声で。不確かなことを。

「私はあの巨人が人間が関与したものと思っっている。もつと言えば、アレは人間が何かしらの手段で変身したのではないかとすら考えている。」

「その理由は？」

「もしあの巨人が我々の知るところを超えた超自然的存在であるなら、つまり敵性金属体のような連中であつるとするならば、巴投げやジャイアントスイング等といった投げ技を…あんなに器用に使うものだろうか？」

萩原は脳内で先の戦闘を思い出す。津市で行われた敵性金属体ヒューマン型と巨人との一大決戦。

あの巨人は、見た目や能力こそ人間からかけ離れたモノであったが、しかし肉弾戦を主体とするその戦い方は限りなく人間そのものであった。悪く言えば、泥臭いプロレスそのものであった。

世間や市民がその存在そのものに大騒ぎする中、元田は既にその正体についての考察を終えていたのである。

「確かにあの様子なら、人間が関係している可能性は高いですね。了解しました、津市被災者の避難先も調べておきます。」

「頼んだ。」

振り返って帰りかけ、萩原は立ち止まる。回れ右して元田に向き直り、再びの質問を投げ掛ける。

「ところで司令。」

「ん。どうした？」

「仮に発見した場合は、どのような対応を？」

言われなくてもわかりそうなものだが、一応聞くようだ。元田は萩原の慎重さを気に入っていた。

重苦しい表情から一変、口角を上げて元田は命じた。

「無論、丁重にご同行願ってくれ。巨人に変身するとしても、立派な日本国民…市民だからな。」

「了解しました。IGF日本支部陸軍、一個師団でゲストをお迎えして参ります。」

重い空気を吹き飛ばすようなトーク。二人は軽い笑みを浮かべつつ敬礼する。

「失礼しました。」

ドアを閉じて去る萩原。それを見届けて、元田は笑みを消した。

唇を引き結び、神妙な面持ちで胸のワツペンを握る。その脳裏には、奮戦虚しく散つていったIGF隊員達の顔があった。

あの巨人が味方になれば、人類は無駄な犠牲を増やさずに済むのだろうか。

「頼んだぞ……」

命令を出すことしかできない自分を、元田は呪った。

瓦礫。瓦礫。瓦礫の山。

一面に広がる鉄筋コンクリートの破片。粉塵が積もった道路には、アスファルトの黒すら見えない。

数人の人間が項垂れた様子でそこかしこで彷徨く。被災者だ。

ある者は大事な人を探し求め、ある人はその場で震え続け、ある人は座ったまま呆然としている。

その中に、祭轟はいた。

就職した会社は物理的に潰れ、スーツはボロボロ。やることもなく、コンクリート片

の上に座っている。

「これは……いったい何なんだ？」

怪訝そうな瞳に写るのは、一本の懐中電灯。それもただの懐中電灯ではない。

ボタンを押すだけで、身長約八十メートルの巨人に変身できる懐中電灯である。

轟はこれを用いて巨人に変化し、敵性金属体相手に大金星を叩き出した。あの巨人がいなければ、この一帯は瓦礫の山どころか更地になっていただろう。

だが当の轟本人はいまだに半信半疑であった。正体不明という言い様のない、例えよ
うのない存在に、心の中に不安が残っている。

「コイツは……」

巨人になった後も轟の手の中にはあの懐中電灯が残っている。もしかしたら、また変身できるかもしれない。

敵性金属体に戦いを挑むことができるかもしれない。

しかし轟は、なるべくなら使いたくない気持ちがあった。頭の悪い轟は、戦うことに恐怖はない。だがしかし、轟の中には戦いに対する躊躇いがある。

自分が戦って良いのか。

先の戦闘を思い返す。

信念もない自分が戦って大丈夫なのか。

I GFならばもつと上手くやれるのではないか。

この懐中電灯は自分が持つて良い力なのか？

轟の心でそれらの考えがぐるぐると渦巻き、大きな「不安」として居座っている。

「コイツは…本当に俺が使うべきなのか？」

顔をしかめて、足りない頭をひたすら絞る。手の中の懐中電灯は、悩みの種は何も答えてくれない。

「俺は…戦うべきなのか…？」

「何を悩んでいるんだい？」

「おっわあ!？」

突然声をかけられて、身体中から冷や汗が吹き出す。振り向けば、木製の屋台が目の前にあった。

赤い暖簾にはらあめんの四文字。どうやらラーメンの屋台のようだ。

「いやあ…いきなりでつけえのが出てきて慌ててそのビルの地下の駐車場に逃げ込んだら、街中ボロボロじゃねえか。それで沢山の人が避難先もわからずに彷徨き回つて、腹空かしてまるでゾンビみてえだ。」

聞いてもいないことをベラベラと捲し立て、屋台がその場にスタンドを立てて停車した。

「そこら辺の人らもそうだが、そんなにしかめっ面じゃどうにもなんないよ。ニイチヤン！腹ごしらえでもしてくかい？」

「腹ごしらえって…」

声の主、屋台の店主がにこやかに問い掛ける。轟は思わず否定的なことを言おうとしたが、鶏ガラの香しい香りに鼻が勝手にひくついた。

ラーメン。ラーメンの匂いだ。

腹の虫が鳴る。

「…一杯いくら？」

「五百円だよ。」

「じゃあ、一杯。」

リュックから財布を引き出し、左手の人差し指を立てる。汚れきったスーツが笑うように揺れた。

店主は禿げ頭を撫でて笑う。

「あいよ、醤油でいいね？」

「あ、はい。」

そして屋台の向こうで、丼の中に手際よく材料を入れていった。

「へい、お待ちい。」

轟の目の前にラーメンが差し出される。

海苔、メンマ、焼き豚が二枚ずつ飾られ、空いたスペースに茶色の煮卵半分。刻みネギがたっぷり散らされ、薄いスープの中には黄色い麺が沈んでいる。

王道的な醤油ラーメンのようだ。

「いただきます。」

割り箸をとる。細い箸は、不格好な左右非対称となった。不器用な轟は、いつも上手に割り箸を割れない。

麺を箸で掬い、つまみ、口へ運んで啜る。

「あっちー！ふーっ、ふーっ。」

少し啜って、出来立て特有の高温に慌てた。息を吹き掛け再び啜る。

旨い。

別に滅茶苦茶美味であるわけでもない。カップラーメンはともかく、そこら辺の店舗で食べられるラーメンとそう違いはないだろう。手作り特有の「味」があるだけで、一段特別美味しいわけではない。

しかし、旨い。

瓦礫だらけの場所で悩み疲れた体に、暖かいスープはよく染みた。

「うめえ。」

「そうだろ？屋台ラーメンは最高だろ？」

轟は頷いて麺を啜り続ける。焼き豚やメンマを頬張り、丼の中身がスープだけになった頃、屋台の店主は轟に聞いた。

「ところでアンタ…何をそんなに悩んでいたんだ？ここに家でもあったのか？」

「いや、家はここじゃないんだけど…」

悩んでいたことは事実だが、その原因はそこではない。轟は少し困った。

まさか「自分が巨人に変身し、敵性金属体を倒せるようになったが、それが正しいことなのか悩んでいるんだ」などと正直に言えない。それは非常識的だ。

かといって轟に嘘をつくだけの口の上手さはなく、下手に喋ってボロが出るのは一番ダメだろう。

なんとかお茶を濁せないものか。

「んじゃあ、昔のこととか？」

ここで思わぬ勘違い。その一言に轟は飛び付く。

「んまあ…そんなところか、な。」

「そうか！それじゃオッチャンが愚痴を聞いてやろうか？」

ずいといと近寄る禿頭から顔をずらしつつも、轟は了承する。自分の過去で心が疲れたこともあるからだ。

人に話せば、それも少しは紛れるかもしれない。

「じゃあおっちゃん、聞いてくれるか。俺の昔話。」

そして、丼の中のスープに目を落とし、轟は少しずつ語りだした。

Bパート

「さーて、まず…何から話すかな。

俺は今21なんだが、それまで色々あったんだよ。まず、母親は俺が物心ついたときにはいなかった。肺炎らしい。たぶん、死ぬほど酷かったんだろうな。

だから親父には男手一つで育ててもらったんだけど、俺も親父も飯なんか作れなかったから、毎日レトルトとか冷凍食品とかコンビニ弁当だった。

月に一度外食に連れてって貰ったんだけど、回転寿司とかファミレスばかりでさ。高い店なんか夢のまた夢だった。

昔から勉強も運動も苦手で…小学校ではそこそこ頑張ってたんだが、中学校になつてからは成績が落ちまくって、学年最下位だった。

まあ高校には無理して入学できたんだよ、それですつげえ頭の良い友達が出てきて、その友達に勉強教えてもらったりしてさ。そいつはなんでもできるすげえ奴でさ、文武両道って言うのかな。とにかくその友達のおかげで留年せずに高校を卒業できた。

だけど大学はダメだったな。友達は別のところ行っちゃまって、俺一人で何ができるで

もなくさ。二年も留年した。

んで、学費とか生活費とかを無理して働きまくって稼いでた親父がな、突然ぶっ倒れちまつて。そのまま墓の下だ。

両親共に葬式なんか上げてやれなかった。金がなかったんだ。後に残ったのはでっかい借金だけ。

親父がな、親父の友達から沢山金を借りて俺を大学に行かせてくれたんだよ。俺がその借金踏み倒したら、その親父の友達の家族はどうなる？

どっちにしろ学費は払えねえ、大学は辞めるしかなかった。

借金もあるし生活もあるから、働かなきゃいけなくなつて。死ぬ気で就職先探して、今年ようやく入った。

まあキツツイ会社だったよ。休みはねえしサビ残当たり前だし上司はしょっちゅう説教してくるし給料も手取り十三万でさ。

でもやつと見付けた働き先だったんだ。頑張つて稼がなきゃって思つたんだ。

それももう無くなつちまつたけどさ。まさかいきなり敵性金属体が出てくるなんて、本当思つてもみなかった。

ぶっ潰されてたよ。この先の場所でき、瓦礫になつてたんだ。俺の働き先。

ついでに住んでるアパートもな、レーザーっていうのか？あれに真つ二つさ。

ここにあるリユックサックが俺の全財産だ。他にはもうなーんにも残っちゃいねえ。ただ俺はまだ生きてる。命は残ってるんだ。だからまだ終わってない。やれることはまだあるはずなんだ。

だから俺は、頑張ろうと思ってる。やれることを探すために。ごつそさん、ラーメン美味かったぜオッサン。」

話し終わった頃には、ラーメンのスープからは湯気が消えていた。そして、屋台の主人の顔からは笑顔が消えていた。

「おいおい、なんだよ、そう…マジな顔して。」

「いや。アンタ、かなり苦労したんだな。」

禿頭をぴしゃりと叩いて笑顔を戻す。主人は轟の丼に煮卵を入れた。

同情的な視線で客を見る。興味本意だったとはいえ、客に辛い気持ちを思い起こさせためてもの詫びのつもりであった。

「サービスだ。食ってきな」

「…ああ、ありがとな。オッサン。」

轟は一口で頬張った。

デスクの上に資料が放られる。写真だ。敵性金属体に襲われた津市を上から撮った画像。

放ったのは元田。他に人がいないとはいえ資料を雑に扱うのは、山積みの作業のせいで昼食を食い逃し、やや荒れていたからである。

そういえばあの襲撃以降一睡もしていない。そうヤワな鍛え方はしていないが、休憩を挟まないとそろそろ重大なミスを起こしそうである。

「これを終わらせて少し休むか……」

そう呟いた時、ノックと女の声が聞こえた。

「美濃田です、コーヒーを持ってきました。いかがでしょうか？」

美濃田とは、戦闘オペレーター美濃田薫子のことだ。この場合のオペレーターとは無線通信によりで行動人員に作戦状況や行動指示を伝達する役職のこと。そして戦闘オペレーターとは文字どおり、戦闘員に指示を出す役職なのである。

それは逆に、戦闘以外の場面では途端に仕事がなくなることを意味する。世界最大規

模の軍事組織であるIGFは資金が潤沢であるので、たまにこのように人員や物資が余分になってしまふ場面が存在する。美濃田がコーヒー片手に副司令室を訪れたのも、暇に耐えかねての行動であろうか。

「ああ、入ってくれ。こぼさないように注意してな。」

無下に断る理由もないので、元田は入室を許可する。

「はい、失礼します。」

一瞬の静寂の後、ドアが開いて人懐っこそうな顔が現れた。美濃田である。髪を後ろに纏めており、両手にはマグカップが乗ったお盆がある。

気の利くことにシユガースティックとミルクの入ったカップ容器と、ついでにティー Spoonもある。

「わざわざすまないな。」

「いいえ、副司令が長時間作業していることはみんな知っています。今は少しだけでも休憩を……」

心配そうに見る美濃田に元田は笑った。

「私はまだ休めないんだ。これを見てくれ」

差し出された写真を見て美濃田は絶句した。それは津市の空撮写真であったが、甚大な被害が描かれている。東部はほぼ更地になり、西部も所々瓦礫の山と化していた。

敵性金属体の仕業である。

「こんなに…」

しかし今更大きく驚くこともできない。美濃田は戦闘オペレーターなのだ。被害に對していちいちオーバーリアクションをとっていたら、色々と保たない。

しかしそれでも、市街地における敵性金属体の被害はすさまじいものであった。

「避難先の指定や救助部隊の派遣等の、差し当たって急務となる仕事はだいたい終わつたが…まだ津市の被災者の人数確認や被災地の瓦礫撤去とかいった事後処理は始まつてばかりだ。それらの指示を済ませなければいけない。それに…」

「それに、どうしたんですか？」

元田は真顔で続けた。

「IGF日本支部の戦力が足りない。特に速効性の高い航空戦力が壊滅している今、次に敵性金属体が現れたら後手を取らざるを得ないんだ。」

「そんな…」

元田の言葉は、暗にこう言っていた。次日本に敵が現れたら、長時間野放しにする他なく、被害は爆発的に増加してしまう。

下手したら、津市の何倍もの被害が出るのだ。

陸奥島の戦いは、それほどまでに大きな影を落としている。あの時の敗北の傷が癒え

ぬまま戦いが進められている。

「私が休んでいては、日本支部の動きが止まってしまふんだ。」

元田はコーヒーをブラックのまま啜った。黒い液体が喉を通る。今の元田に、苦味とカフェインでは効き目が弱い。

「働かなくては……」

美濃田も元田も、神妙な面持ちであつた。あまりにも絶望的な状況は、二人の間に肌寒い空間を作り上げる。

下っ端の自分の想像以上に悲惨な現状を知り、美濃田は改めて今の人類がどのような試練に立ち向かっているかを実感する。

「ごちそうさま。少し落ち着いたよ」

コーヒーを飲み終え、元田は美濃田の持つて来た盆の上にマグカップを置いた。

「安心してくれ美濃田君。私が全力で今の状況を打開してみせる。絶望してはいけな
い。」

元田は姿勢を直し、執務デスクの前で胸を張って見せる。そこには、この人ならなんとかしてくれるという、安心感を与える凄みがあつた。

指揮官たるもの、部下を絶望させて作業能率を悪くさせるのは不味い。古今東西において士気というのは重要な要素だ。

元田のフォローは上手く言ったようで、美濃田は表情を明るくした。「は、はいっ。失礼しました！」

お盆を持って美濃田が部屋を出る。ドアの前でペコリと一礼するのを忘れないあたり、彼女の人柄がうかがえた。

ドアが閉まる音を聞いて、元田を肩の力を抜いた。胸のワツペンを握り、机の引き出しから写真を取り出す。

そこには、肩車する父子と、それに寄り沿う女性が写っていた。元田と、その妻子だ。「…そうだな、俺がなんとかしなくっちゃならない。」

亡くなった妻に顔向けできるように、または今も頑張っている息子を守るために、元田は心を奮い立たせた。家族の写真は、いつも元田に勇気を与えてくれる。

写真を仕舞い、元田は引き出しを閉じた。深呼吸を一度して、資料を一枚手に取る。仕事の再開だ。

小休止なんてとんでもない。今日日本を救うのは、他ならぬ自分なのだ、元田は己に言い聞かせる。

そして先ほど放った資料を眺め、次の仕事に手をつける。

その時、机の上のタブレットが、喧しく鳴った。

「なんだ!?!地震か!?!」

唐突な揺れ。アスファルトの亀裂が広がり、コンクリートの破片がゴロゴロ転がった。

ラーメン屋の店主が屋台を必死で支える。それを手伝いながら、轟は辺りを見回した。

轟は頭が悪いが、それでも妙な胸騒ぎを抑えられなかった。日本は確かに地震が多い国だ。しかし、今の轟は、別の何かを想起してしまう。

「まさか…」

その予想は、的中してしまう。

二人の見るビルの向こう、浮き上がるように黒い物体が現れる。それは少しの間だけ空中で静止し、ぐにぐにと形を変えていく。

物理法則を無視した、おぞましい化け物がそこにいた。

「敵性…金属体!?!」

ラーメン屋の店主が顔を真っ青にして叫ぶ。もう散々暴れまわったというのに、まだ津市を蹂躪しようというのか。

「いやああああああ!!」

「たすけ、助けてくれーっ!」

「IGFは、誰か、IGFを呼んで!!」

「逃げろ!早く逃げろ!」

うなだれていた被災者たちが血相を変えて駆け回る。無理もない、つい最近その脅威を身に染みて理解したからだ。

ラーメン屋の店主も屋台を引っ張ってその場から離れようとする。しかし、さっきの客が自分と逆方向へ走っていくのに気付いて、振り向いた。

「何やってんだアンタ!戻れ、逃げろ!」

叫びが届いたのか、青年は立ち止まって店主の方を向いた。

「ラーメン。美味かったぜ、大将!」

「あつ、おい!」

ラーメン屋の店主が止める暇もなく、その客は、逃げる人混みに消えていった。

敵性金属体の猛威から必死に逃げようと、数え切れない人間が必死に走る。老若男女

の区別なく、その様は地獄の川流れのようである。そんな人間の濁流の流れを真つ向から逆走する男が一人。

轟は走る。懐中電灯もどきを握りしめ、敵性金属体の元へひたすら走る。

手に持っているのはただの懐中電灯ではない。灰色の巨人に変身し、敵性金属体すら倒せる力を持ち主に与える物体だ。

そんな危険物を逃げ惑う人々の近くで使つては、みすみす被害を増やすだけ。人間から離れた位置に行けるように、轟は敵性金属体に近づいていく。

空中で静止していた黒い物体が、その姿を完全に変化させた。六本の脚と複数の羽。ハエか。否、発達した複眼と体の割に大きな胸部は虻の特徴だ。

敵性金属体ホースフライ型が、壊滅状態にある津市上空に姿を現した。

「おわっ……つつ……」

ホースフライ型の羽ばたきは、少し離れた位置にいる轟を転ばせた。数十メートルサイズの虻の羽は、地上の人間を吹っ飛ばしてしまうほどの風を起こしているのだ。桁違いのサイズはそれだけで大きな脅威となり得る。

羽を超高速で羽ばたかせ、ホースフライ型はさらに上昇していく。一定高度で止まると、頭部をゆらゆらと左右に動かし、地上を睥睨している。

辺りを見回すようなその動きからして、恐らくは何かを探しているのか。

好き勝手暴れないのなら好都合だった。

「よし、行くぞ…」

祭轟は頭が良くない。あの巨人にもう一度成れるなんて保証はどこにもなかったし、変身したとしても戦って勝利できるかは考えていなかった。

だが、それに気付いたとしても、轟は引き下がりはしなかつただろう。彼は許せなかつたのだ。

沢山の人々を脅かす、敵性金属体という理不尽を。

「うおおおおおウツ!!!」

懐中電灯を空に突き上げ、側面のボタンを押し込む。先端から光が迸り、辺り一面を眩しく照らした。

その光はやがて周囲一帯を包み、その中に巨大な人影が浮かび上がる。

光の中から、シルエットそのままの巨人が、仁王立ちで出現した。

敵性金属体ホースフライ型は、待っていたとばかりに巨人に飛びかかっていった。

I G F 日本支部作戦指令室では、中央の一番大きなモニターに巨人と敵性金属体を写

していた。必死で仕事をする戦闘オペレーター達は、美濃田を含めて、各々の役割の途中でチラチラとその様子を伺っている。その場の誰もが、巨人のことが気になってしようがないのだ。

「来たか……」

IGF隊員に住民の避難を最優先させる旨の命令を出した後、元田は中央モニターに映る巨人を睨んだ。あれは人類の希望か、そうではないのか。それを見極める必要がある。

ワッペンを握りしめ、拳を握り、呼吸を整えた。

元田の視線の向こうで、二体の激突が始まる。

Cパート

上空から襲いかかる敵性金属体。巨人は左アツパーで対抗する。しかし空戦に優れた敵には、振り上げた腕などは格好のターゲットとしかならない。

ホースフライ型の口の棘が巨人の左腕を引っ搔く。思わず腕を引っ込める様子から、ダメージは通っているようだ。ならば好都合と、敵性金属体は反転して追撃の体制に移る。

が、空中で振り向いた虻の面に、光の玉が叩き付けられた。巨人の新たな技だ。平手を遙か向こうの敵に振り抜くことで、手裏剣のように小さな光弾を放っている。一発、二発。三発目を食らったあたりでホースフライ型は全速退避する。

それを見た巨人は悔しがるように拳を握った。今使った光弾は遠距離攻撃には向くが、殴る蹴るよりダメージが低いようだ。ふわふわ飛ぶ敵に拳骨を叩き込んでやれば、一撃で地面に叩き落とせるのに。

さらに、敵性金属体は離れた場所へ飛んで行ってしまった。あの距離では光弾の狙いもずれてしまう。追いかけるべく、巨人は走り出す。

萩原は二つの巨影の戦いをテレビ中継でじっと見ていた。津市に再び敵性金属体が現れ、それと同時に再び巨人が現れる。

彼女には使命があった。金属体と戦うあの巨人が人間であるとしたならば、IGFに連れていくと言う使命が。

あの巨人が人間であるかどうかは元田副司令の推測であったが、テレビを見ているうち、萩原はその推測が確かなものであると確信していく。

あの拳の振り方、あの走り方、そして攻撃を受けた際の痛がるリアクション。これらが人間的でないなら何というのか。

巨人と金属体は戦場を変えるようだ。津市の東部。そこは先の敵性金属体ヒューマン型による被害が大きかったため、IGF・陸上自衛隊合同で徹底的かつ緊急的に避難活動を行わせた場所である。つまり、もう人はいないはずの場所だ。

もしもその場所で決着がついて、巨人が勝利し、巨人が変身を解除して人間に戻れば、すぐさまにIGFジャパン陸軍がその人間を見つけ出せる。

萩原は戦いを見つめている。巨人の戦いは、彼女の戦いに繋がっているのだ。

二体の巨影が向かった先は、津市の東部であった。幸か不幸か、そこは前回の敵性金属体の攻撃で完全な更地となつてしまつてゐる。化け物同士の取つ組み合いが起きて、瓦礫が細かく砕けるだけで済みそうだ。喜べることはないのだが。

ホースフライ型はくるりと巨人の方を向く。そして目の中心からレーザーを放つた。巨人は苦もなく身をよじつて避ける。

こちらを向いたなら逃げることはできない、このまま近付いて殴り付けてやろうと、巨人は走り続ける。廃墟となつたビルを飛び越え、潰れた倉庫を蹴つ飛ばして走る。

しかし敵との距離は縮まらない。レーザーの第二射を避けて、巨人はようやく追いかけてつがが続く理由に気づいた。敵は後ろ向きに飛行している。

蛇の飛行はホバリングに似ている。絶えず羽を動かすことで視線とは逆方向に飛行することもできるのである。

走つても走つても追いつけない。敵からの一方的なレーザー攻撃を避けるうち、巨人の体力は猛烈に消耗していく。腕を振つて光弾を放つても、距離が遠くて当たらない。

削られる集中力。このままギリ貧か、と考えたその時、轟の脳裏に前回の戦いがフィードバックする。確か前回に敵性金属体と戦った時、この巨人は飛べた。

巨人の大ジャンプ。巻き上げられる土煙が遠くなつていく。

頭の中でイメージする。飛べ、飛べ、飛べ。飛べた。まるで見えない翼が生えているように、空中を泳ぐように、身長八十メートルの巨人がビュンビュン飛んでいる。

眼下にはズタズタになった津市の街並み。そして、敵性金属体ホースフライ型。

高速で近づく巨人。敵性金属体はそれを避けようとした。が、虻というのはそこまで速く飛行できるわけではない。そう、飛行速度は巨人の方が速いのだ。

対空攻撃のつもりか、敵性金属体ホースフライ型は上へレーザーを撃つ。しかし巨人は避けることすらしなかった。

無意識的に腕の発光体に別の手をかざすと、手の中に細く短い棒が現れる。握り締めると、それが柄となり、細長い光の棒が伸びた。

レーザーを光の棒で防ぎ、速度そのまま敵性金属体に急速接近する巨人。一秒もしないで接近されたホースフライ型の面に、今度は光の棒が叩き込まれる。

巨人と敵性金属体は、もろともに大地へと激突した。

大きなアスファルトの塊があちらこちらへと飛び散る。周囲はたちまち土煙の中へ消えた。

しかし土煙はすぐさま切り裂かれる。二体の墜落地点より、片方が高速で打ち上げられたからだ。

土煙が晴れ、立っていたのは巨人。左腕を上突き出している。先ほど当てることのできなかつた左アッパーで敵をぶつ飛ばしたのだ。

強烈な一撃を貰ったからか、はたまた昆虫特有の体の脆さも忠実に再現したからか、敵性金属体はなすすべなく空へ飛んでいく。最大高度に達し、自由落下で地に吸い込まれる時、その落下場所には巨人が光の棒を握り締め立っていた。

ホームラン。まさにその言葉が相応しいであろう。振り抜かれた一閃がホースフライ型を完璧に捉え、もう一度上空へとぶつ飛ばす。

光の棒を投げ捨てた巨人は、ベースへ走るわけもなく、不思議な構えをとった。

額の前で拳を作った両手首を交差させる。すると額の発光体に光が収束していく。視線の先にいる敵性金属体に狙いを定め、そして両腕を振り下ろした。額から放たれるのは、山吹色の一条の細い光線。前回の戦いで使ったものとはまた別の技であった。

標的の敵性金属体は、先程の攻撃の影響で羽が千切れ落ちてしまったため、吹っ飛びながらピクピクと蠢くしかなかった。その状態で回避ができようはずもなく、巨人の光線の直撃を受ける。

きつちり一秒。山吹色の照射を一秒間受けた敵性金属体ホースフライ型は、最大到達

高度に達した瞬間に大爆発。大空に不恰好な花火を上げ消滅した。

破片の一つもなく、塵一つ残さず完全に消えて無くなったのである。

それを見届け、巨人はようやくやく肩の力を抜いた。今回も勝利をもぎ取った、その実感を胸にしながら。

I G F 日本支部作戦指令室では、巨人の勝利が確かに確認された。巨人の勝利と同時に、今回出現した敵性金属体の完全消滅も確認された。

敵性金属体は本来、撤退するほどのダメージを与えたとしても原型をほとんど保ったまま地中奥深くに逃げてしまい、完全に仕留めることはできない。一度撃退しても同じ個体が現れ、その度に大きな犠牲を払って撃退することを繰り返さねばならない。こちららは消耗を続け、あちらは消耗が存在しない。そのせいで人類は延々と消耗が存在しない相手に対して消耗戦を行う羽目になっている。

しかも敵性金属体は一体だけではない。地球に来訪した時、連中は複数の群体として

地球のマントル付近へ潜り込んだ。正確な数は不明だが、一体も消せていない状況なのに、複数体もいることがわかつているのだ。

だがあの巨人は、敵性金属体の一体を欠片一つなくこの世から消してしまふことができた。そのメカニズムは未だ解明できてはいない。しかし、あの巨人を人類の味方として引き込めたらどうだろう。

元田は、可能性の話を想像した。

敵性金属体の全体を消耗させることができるメカニズムが手に入れば、人類の勝利が目に見えてくるのではないだろうか。仮にその研究が失敗したとしても、あの巨人と連携して敵性金属体と戦うことができれば、人類の勝利も不可能ではない。あるいは、メカニズムの解明と巨人のスカウトの両方が叶えばどうだろう。

絶望的な状況に降って湧いた希望。画面の向こうで佇む巨人を、元田は瞬きせずに見つめる。

「勝利が見えて来たと言うことだな」

誰ともなしに囁き、手元の通信端末を操作する。数秒の待機音の後、お目当ての相手に繋がった。

「元田だ。萩原君、兵力をかき集めて戦場を包囲してくれ。今がチャンスなんだ」

戦闘が終わった後、轟はすぐに変身を解除した。別段特別なことはしていない。ただ人間の姿に戻りたいと考えただけである。その意思が汲み取られたかは定かではないが、巨人はいなくなり、無事、人間の轟に戻ることができた。

戦闘の疲れからか轟はしばらくの休憩を欲した。すぐ近くの瓦礫に手頃な鉄骨があったので、それを背もたれに座ることにする。巨人の時は気にもしなかつたが、被害が大きかったこの一帯にも、まだ原型を残す建物が点々としていようだ。

ひしやげた鉄骨に寄りかかって、轟は深く息を吐いた。

既に巨人の姿はなく、そこには人間・祭轟がいるだけである。しかし、轟の中では未だに、敵性金属体と戦ったあの感覚が消えていない。戦闘の興奮とでもいうのだろうか。

先日まで普通の日常を普通に送っていた彼にとって、その熱は持て余すに足りるものである。

「慣れなくちゃならねえ……よな？」

ポケットから例の懐中電灯モドキを取り出し、誰にも聞こえないような声で呟く。

すると、轟の視界に人影が写った。IGFの制服だった。

「それは、これからも敵性金属体と戦うために……と言う意味かな？」

「は……え、どういう……アンタは一体……えっ？」

声をかけられ、轟は凄まじく狼狽えた。非常事態に頭が追いついていない。

制服を着た女はツカツカと歩み寄り、轟に右手を差し出した。それと同時に、物々しい装備をした兵隊のような男達が二人を取り囲む。様子からして、女の部下であることは間違いない。

つまり、IGFの人員だ。

「君があの人であることは間違いないね？」

嘘をついたら針千本でも飲まされそうな気迫だった。

「あ、は……ハイ」

女は笑顔を作り、座っている轟に右手を押し付けてくる。握手を求めているのだろう。

断る理由もないので、轟はそつと右手を握る。そして華奢っぽい体には全く似つかわしくない怪力で一気に引き起こされた。

「おわわわっ!？」

足に力を入れていないまま立たされ、轟がすつ転びそうになる。

「うおつとつと…あ、どうも」

その背中を、間一髪IGFの隊員が支えた。

「突然すまないね、私はIGF日本支部陸軍隊長の萩原だ。単刀直入に言おう」

親切なIGF隊員に支えてもらいながら、轟は萩原と名乗った女の顔をキョトンと見ていた。状況を飲み込めない号に、萩原は言う。

「一緒に来て欲しい。IGFは、君の協力を必要としている」

第3話 その名はゼダ

A.パート

海の一部を埋め立てて、その上から作られたIGF日本支部基地。いくつものエリアに区分されたその基地の中で、中央部に置かれた司令部がある。轟はそこで軟禁されていた。

目の前にあるのは、鏡。轟は今、洗面台で顔を洗い、目を覚まそうとしている。

「夢じゃあないよなあ」

IGFは、敵性金属体から人類を守る国際軍事組織で、轟がいるのはその日本支部の中樞だ。

ただの一般人であるなら、近づくことすら絶対ないであろう場所。だが、轟自身は、何故自分がここにいるのかをすっかり認識していた。

尻ポケットを叩く。そこに入れておいたものは、今はない。無くて当然か。

それを使えば、轟は敵性金属体を沈める、戦う巨人に変身するのだから。

「没収されてら。そら、取り上げるよな……」

真つ白で清潔な男子トイレ。LEDの光が眩しい。男子トイレから出ると、自分を見張る役目を与えられたIGF隊員がいた。

鬼瓦を彷彿とさせる、四角くていかつい顔。確か名前は花園だったか。

「祭さん、もう終わったか？」

「まあ、うん。次はどこに行くんだ？」

「元田副司令が会いたいとおっしゃってるんで、副司令室かな。じゃあ着いて来て」

花園はフランクに接してくれた。軍事基地に連れてこられた轟に使っているのだろう。なかなか気の利く人間のようだ。

花園の背中を追いかけながら歩く。その間にも、轟は周囲を見回した。

白い天井、白い壁、白いフローリング。壁に窓はなく、時折ベンチがあったことを除けば、随分と殺風景な基地であった。

そんな白い廊下にあつては、自分と花園は浮いた存在のように見える。

「こつちだよ」

轟がキョロキョロしながら歩いて行くと、グレーのドアの前で花園が手招きをしている。扉の色は壁と塗り分けられているようだ。

失礼します、と一言告げて、花園が自動ドアの横のボタンを押した。シュツ、と小さ

な音を立て、二人の目の前のドアが右にスライドする。

轟の目に飛び込んできたのは、飾り気のない執務室であった。ロッカーや本棚といった備え付けの家具はあるが、必要なものが必要なだけ置いてあるといった風情で、実に殺風景だ。

そんな殺風景な部屋の中心に、大きな執務室があつた。そして、そこに座っている、I GFの制服を身に纏う、彫りの深い顔立ちの男。

「君が…祭轟君」

「お、オス。その通りです。初めまして…」

轟を見やると、男は椅子から立ち上がった。

「私は元田義弘、このI GF日本支部で副司令官をしている。今…というかここ3年は司令官が出張していて、私が実質的にこここの最高責任者をさせてもらっている」

「は、はあ…お偉いさん？」

「そういうこと」

流し目で花園を見つつ、小声で聞く。花園は即答した。

鬼瓦のような顔をさらに強張らせながら、花園が敬礼を行なった。

「陸戦隊歩兵隊長花園伸介、お呼びの方をお連れしました！」

「ご苦労だった花園君。ありがとう、元の業務に戻りたまえ。萩原君によろしくな」

「了解で、あります！」

回れ右して副司令室から出ようとする花園を、轟は不安そうな目で見詰めた。俺を知らない偉いさんと二人きりにしないでくれ、と。

「良い人だから、心配しないで」

だが、花園はすれ違う一瞬に小声をかけるだけで、そそくさ部屋から出ていつてしまった。

轟が止める暇もなかった。

「さて…祭轟君。面倒な話は好きかな？」

「嫌いです」

即答。当たり前前の答え。元田が頷く。

「では、ここにきて早々悪いが…訓練場に行く。着いてきてほしい」

「はあ…」

通信機と水筒をそれぞれの手に持って、元田は椅子から立ち上がった。

広い訓練場。テレビで見た陸上競技場のような場所。そこに、元田と轟がいた。

二人から少し離れた場所には白衣を着た集団がいて、何やらカメラのような機械やパソコンに似た機械を抱え、その場に留まっている。

「君が寝ている間、これを使わせてもらった」

「ええ!？」

元田が制服のポケットから取り出したのは、懐中電灯に似た何かである。轟はそのアイテムがどういったものであるか知っている。

あの巨人への変身に必要な道具だ。これのボタンを押せば、敵性金属体を打ち倒す存在に変身できる。

「このボタンを押せばいいんだろう?だが…誰が押しても、あの巨人は現れなかった」

元田は、轟の手を取り、懐中電灯もどきを持たせた。

「ここで見せてくれ。君にしか使えないと言うのなら、今この場で変身してほしい」

ちらりと、と、手のひらの物体を見る。こんなに広い場所であれば、変身しても問題はないだろう。

無闇矢鱈と動かなければ、足元のIGF職員たちに危害を加えてしまう心配もない。

「わかりました。離れていてください」

「ありがとう。向こうの彼らの方に行ってくる」

元田が踵を返し、小走りで白衣の集団に向かっていく。やはり、あれらは彼の部下であるようだ。

元田がすっかり離れたのを確認してから、轟は右手に変身アイテムを握ったまま手を

振った。

向こうの白衣の一人も、それに反応するように手を振る。何かは知らないが、向こうの準備も万端のようだ。

「行きまーす！」

轟が宣言した、と同時に、ボタンが親指で押し込まれた。

周囲が光に包まれる。眩しい光が轟を塗りつぶし、天に向かって伸びて行った。

光が少しずつ、巨大な人のシルエットを形作る。輝きは少しずつ収束していき、ついに、あの巨人が姿を現した。

元田が、白衣の集団からマイクを受け取る。顔に近づけて、口を開いた。

「あーっ、あーっ。聞こえるか？」

それに反応して、巨人が元田を見下ろす。顔の中心にあるゴーグルのような目から、確かに視線を感じた。

「絶対に動かないでくれ。身じろぎひとつもダメだ」

巨人は、元田の方を向きながら首を縦に振った。

それを確認すると、元田は右隣の女に目配せする。彼女はIGF日本支部研究チーム班長、朝香玲奈。ゼダを研究し、敵性金属体を倒すヒントを探る任務を与えられた人間だ。

朝香は他のメンバーと違い、白衣を着ていなかった。代わりに、ごつくて分厚い白い防護服に身を包んでいる。放射線も超高熱も防ぐ代物だ。

防護服がのそのそ動き、スプーンとフラスコを手に持った。そしてゼダの方にたったか走って行く。

それを尻目に、元田は白衣の研究員たちの話し声に耳を傾けた。身内以外と話さない彼らは、常にボソボソとした早口で興奮気味にまくし立てる。

耳の方に意識を集中せねば、とても会話を聞き取れない。

「これはすごいすごいすごいまだ潜在エネルギー値が上昇している！原子力発電所3つぶんのエネルギーがあの中に」「表面から出てきている粒子はなんだろう朝香班長が持ってきてくれるかというかこれは」「あのサイズなのに少しも肉が崩れないし超重いだろうに地面が陥没しないのはいったいどういうことな？骨格に何か秘密があるのかもしくは外骨格で構成されてるのか」

すつと、離れる。報告は後で聞くことにしよう。

だが、彼らの興奮の一部はわからなくもない。目の前の巨人の秘密は元田もよく知っていた。

研究チームは知的好奇心から、元田は期待から、あのゼダの秘密に興奮しているのだ。そうこうするうちに、朝香が戻ってきた。おそらく、巨人の足の表面をスプーンで掬

い、フラスコの中に入れたのだろう。フラスコの方にはしっかりと蓋がしており、絶対に保存しておくという強い意志を感じる。

「どう!どう?」

「流石っすね朝香班長確かに粒子がありますよ」

「おっ…密閉されたことにより粒子が増えている?!」

「いったいどのようなメカニズムだろもしかしてこれが敵性金属体を倒す手がかり?」

「戻って徹底的に調べたい!じっくり見たい!」

一通りひそひそ話を終えた研究班が、ねっとりとした目で元田を見やる。軽く後じさりしつつ、元田は言った。

「ご苦労だった、戻ってよろしい。その粒子の調査・研究を開始してくれ。責任は私が持つ」

その言葉を聞いて、研究チームはそそくさ立ち去って行った。

白衣と防護服の集団の後ろ姿を眺めてから、元田はもう一度マイクに声を吹き込んだ。
だ。

「あの方に、真っ赤な戦車の残骸があるのが見えるか?」

元田が指差した方を、巨人が見る。首を伸ばしているから、少し遠いと感じているかもしれない。

やがて確認したのか、巨人は右手の親指と人差し指で丸を作って見せてくる。

「あれに、ここから攻撃をしてくれ。軽くでいい！」

巨人は、戦車の方と元田を交互に見た。大丈夫なのかどうか不安に思っているのだろう。

「赤い戦車だ。赤い戦車なら問題ない！」

再度念押しすると、巨人はようやく標的に狙いを定めた。

手のひらを向けると、そこから一瞬光が迸る。放たれた光の弾丸は、あっという間に赤い残骸に到達。爆煙をあげて粉々にせしめる。

双眼鏡でその様子を見ていた元田は、制服の胸のワッペンを握り潰した。

「彼がいれば……」

深夜0時を過ぎた頃。デスクトップパソコンのキーボードを叩く音が止まらない。

元田が、仕事を続けているのだ。

I G F 日本支部副司令の仕事は山積みだ。今は司令の仕事も兼任している。作るべき書類は増える一方だし、行うべき指示だって山積んでいる。

徹夜だって何度もしてきた。それに、今このペースを止めて小休止すれば、そのまま

ダメになってしまいかもしれない。

一種の強迫観念すら感じさせる仕事ぶりの最中、元田のパソコンに通信が入る。誰だ、と思えば、色黒のたくましい男だった。

彼は大竹隆二。この日本支部本来の司令官だった。

「こんにちは元田くん。いや、そちらの時間ではこんばんはかな。夜分遅くにすまないね」

「ご無沙汰しております、大竹司令。お気になさらず。ところで、いかが致しましたか？」

「ああ、まあ、後々に正式な辞表が来ると思うが、今言っておいた方が君の精神衛生上いいかと思つてね。君に朗報が二つある」

「朗報が、二つ……？」

画面の向こうの上官は、にこやかな笑みを浮かべて告げる。

「元田君、これからは君が、IGFジャパンの司令官だ」

「わつ、私がですか?!しかし、大竹司令は未だご健在で……」

「3年もそこを開けていたからな、いつそ本部直属に異動した方がいいという判断らしい。それで、俺の異動に伴つて、君の役職も上にスライドするというわけだ」

目を丸くしている元田に対し、大竹は笑いながら話を続ける。

「俺のことは心配する必要はない！日本支部じゃお飾りみたいなもんだつたし、実質的なトップは君だつたらう。それに、やることは今とはほぼ変わらんぞ」

「そ、そうなのですか」

「ああ。むしろ、司令官となつたことで色々な補助将官がつく。今みたいに夜通しで作業する必要もなくなる」

「あつ…は、はあ」

元田は苦笑すると同時に、希望に胸がすくような気分を抱いた。副司令という立場上秘書を持てなかつたので、元田の受け持つ仕事はいつも限界ギリギリを超えていた。

それが、司令という立場に立つことで改善される。

「辛い仕事を続けさせて済まなかつた。これからも、私がいなぶんも日本支部を守り続けてくれ」

「…不肖元田義弘、謹んで受け継がさせていただきます」

「あまり肩肘張ると、司令になる前にぶつ倒れちまうぞ！」

「き、気をつけます」

大竹は、そういうところがダメなんだよな、と苦笑いした。その真面目さが日本支部を引つ張つてくれているとはいえ、いつも気を張り詰めていたら、無理が祟るのは目に見える。

今言っても仕方ないか、と間を置いてから、先代司令官は再び語り出す。

「で、次の朗報は…あの巨人を、日本支部の正式な戦力として扱ってもいい、という御達しが出た。これも辞令が近日行くとと思う」

「正式な戦力に…それは、本当ですか!？」

「無論我々は…祭轟だっけ？彼本人の意思を尊重するとともに、その身の安全やプライバシーの保証に全力を尽くす。だが、敵性金属体との戦いでは、あの巨人は人類を救う最強戦力となってくれるかもしれない」

元田は口ごもった。確かに、轟が変身するあの巨人がいれば、人類の戦力は大幅に上がるだろう。元田だってそれを望んでいた。

だが、今になって彼の心に小さな痛みが走った。

「…果たして」

「んっ」

「民間人に…敵性金属体との熾烈な戦いを行わせていいのかと…。しかも、最前線で…」

その問いに、大竹は唸った。顎を撫でて眉を顰める。

「確かに、それについては本部でも揉めた。あの巨人の正体が知れた時点からずっと、戦力として取り込むかどうかを会議してて、今それが終わったところなんだ」

「お疲れ様です」

「それはお互い様だよ。まあ、それで…結局は本人の意思に任せることにした。IGFの一員として、敵性金属体に立ち向かってくれるかどうか」

「どんな答えが待っているんでしょね…」

腕を組み、二人は不安げにため息をついた。

「今ここで考えても答えは出ないが、それでも考え込んでしまう。YESと言われても不安はあるし、NOと言われても困ってしまう。」

「まあ、それに関してだ。俺に、IGFジャパン司令として最後の仕事をさせて欲しい」「さ、最後の仕事、でありますか」

「そうだ。あの巨人の名前を決める。いつまでも巨人巨人じゃ、味気ないだろ」

「はあ…」

元田は困惑した。大竹元司令殿は、最後の仕事がそんなものでいいのだろうか。

だが、大竹の目は輝いている。名付け親になることが嬉しいのだと言わんばかりに。

「あの巨人を見たとき、本部の連中が口々に言ったんだ。コレだ！ってな。コレ、つてのは漢字で書くとはって書く。わかるか？」

「ええ、まあ。日かんむりの…色即是空の是ですよね」

「そうだ。是だ！の読みを変えて、ゼダ！ゼダってのはどうだろう」

「いいですね、かっこいいと思いますよ」

「はっはそりやよかった。この名前が、世界を救う名前になるぞ！」

日本からはるか離れた土地で、日本にいるその巨人の名前を決めて、大竹は笑った。彼の頭の中では、ゼダが地球を救うのは、ほぼ確実なことになっているらしい。

「話は以上だ。諸々、よろしく頼むぞ元田君！」

「ありがとうございます大竹…司令」

「次会うときは、別の呼び方になっているだろうなあ。ご苦労様、じゃあな！」

通信が終わり、大竹の笑顔が画面から消える。黒い液晶に映るのは、新しい日本支部の司令官だ。

「ゼダ、か…」

元田はその名を口にした。それは世界を救う名前なのか。それはもうじきわかることだろう。